

大会顛末記

第 24 回国際 P2M 学会秋季研究発表大会結果報告

大会企画委員長 和田 義明

国際 P2M 学会では、春と秋の年 2 回、研究発表大会を開催しています。今回は 2017 年 10 月に開催しました秋季研究発表大会について報告致します

大会テーマ：

「インバウンド産業雇用創生に向けたプロジェクト・プログラム・マネジメント」

開催日 : 2017 年 10 月 14 日

開催会場 : 青山学院大学 青山キャンパス

参加者数 : 43 名



概要

1. 研究発表

A～C の 3 トラックにおいて、計 17 題の研究発表があった。A トラックのテーマは、「インバウンド地方創生」、B トラック「P2M」、C トラック「研究開発/P2M」と設定した。各トラックについて報告する。

1-1. A トラック

A トラックの初めは、「青森県での地方創生プログラムマネジメントでの組織連携」である。再生可能エネルギーを利用してナノバブルオゾン水を製造する衛生管理社会システム

を構築し、農業生産物の安全ブランドを形成させる地方創生プログラムを取り上げた発表であった。このプログラムをシステムと位置付けて、システム論の手法を取り込んだ新しい運営方法について考察したものである。

次に、「地域資源を活用したインバウンド戦略と地域ビジネスへの発展に関する研究」という題である。インバウンドにおいて P2M が新たに取り組むべき学術・実業領域の課題発見を目指すとともに、国際文化交流プログラムの実践を通じて得られた知見から地方創生に資する地域ビジネスへの発展可能性やその課題について考察する発表があった。

3 番目は、「P2M フレームワークを適用した地方創生人材育成プログラムの提案」である。地方創生の人材像の中で『地方創生ディレクター』に焦点を当て、P2M のフレームワークの中で 3S モデルを適用した「地方創生人材育成プログラムのカリキュラム」の設計に関する発表であった。

4 番目は、「P2M フレームワークを活用したスマートファクトリー人材育成プログラムの産学連携研究開発」である。青山学院が P2M を適用して進めて来た人材育成プログラムの概要や新設したスマートファクトリープロジェクトの具体的なカリキュラム・受講者像などを論じた上で、P2M 適用の成果と課題について論ずる発表であった。

5 番目は、「P2M を応用した教育組織による PBL 型授業の実践」という題の発表があった。課題発見・探求のための批判的思考力や判断力、チームワークやリーダーシップといった汎用的能力育成を目指した PBL (Project

Based Learning) 型授業においてインストラクショナルデザイン手法を用い、P2M を応用した教育組織で運営する効果を検証した内容であった。

6 番目は、「ソーシャル・イノベーションと P2M」である。P2M の価値創造プロセスを「まなざし」の視座で捉え、3S モデルを技術経営の新潮流(社会構成主義)を基に整理した。更に、「技術決定論」と「技術と社会のダイナミックな相互作用を重視する理論」との相違から、ソーシャル・イノベーションの可能性を提示した上で、「留学生のまなざし」からの地域活性化プロジェクトの調査解析を通して、P2M の有効性を論ずる発表であった。

Aトラックの最後は、「P2M フレームワークを活用した『地方創生ビジネスモデル創造』人材育成プログラムの構築」である。インバウンド増を目指し、地方創生を担うグローバル製品サービス戦略プロデューサーの教育ツールとして、P2M のフレームワークに基づいて「地方創生ビジネスモデル創造」人材育成プログラムを構築する試みについての発表であった。

1-2. Bトラック

初めに、「プラント建設プロジェクトにおけるリスクに対する感受性とプロジェクトの成否との関係」と題して、プラント建設プロジェクトにおけるリスク管理に関する発表があった。複数プロジェクトのクラスター分析により、リスクを分類、数量化することによってプロジェクトの特徴との関連性を可視化し、更に、リスクに対する感受性の違いによるプロジェクトの成否への影響を考察したものである。

2 番目は、「プログラムにおけるプロジェクト価値継承のための方法論」である。企業ビジョン達成を目指した研究をプログラム・エンジニアリングに発展させることを目的とし、

プロジェクト価値継承をマネジメントする方法論について提案した。更に、この手法を適応し、プロジェクト価値継承に関する「プロジェクト組織」と「専門部門」の役割について論ずる発表であった。

3 番目は、「プロジェクトファイナンスにおけるリスクマネジメントに関する考察」と題した発表である。コーポレートファイナンスとプロジェクトファイナンスをリスクマネジメントの観点から整理した上で、PFI (Private Finance Initiative) について、ステークホルダーの間のリスクの関係を明らかにし、リスクマネジメントフレームワークを提示する発表であった。

4 番目は、「海外建設プロジェクトトラブルへの対応策に関する基本的考察」である。エンジニアリング振興協会がまとめた海外建設プロジェクトのトラブル事例集を、IDEF0 を用いて整理解析した上でトラブルの発生仕組みを特定し、トラブルに対応する手法について検討を加えた発表であった。

5 番目は、「ユーザーイノベーションのための P2M-次世代システムのマネジメントのための考察」である。顧客に価値を享受するよう仕向けることをユーザーイノベーションと定義し、その実現のために検討しなければならない問題意識とマネジメントするための前提となる考え方について、オートポイエーシスの概念を取り入れながら考察した発表であった。

Bトラックの最後は、「インダストリー4.0 に想起される新たなイノベーション分類の提言」である。イノベーションを ①Process Innovation、②Product Innovation、③Social Innovation の3つに分類し、複数の事例を示した上で、イノベーションを推進・実現化するためには、P2M が重要な役割を果たすことを提唱する発表であった。

1-3. Cトラック

初めは、「ソーシャルボタンと加重平均を用いた集合知集約方式の提案」と題した発表である。プラットフォーム上の情報から意思決定に有用な意見を抽出する一つの方式として、ソーシャルボタンを用い、賛同データと加重平均を用いた集合知集約方式を提案する内容である。これにより、集団の上澄み的な意見を、納得感が高いプロセスで抽出でき、意思決定の正確性向上と、参加者の帰属意識向上が期待されるという発表であった。

2番目は、「技術開発と商品化への顧客要望展開によりダーウインの海を越える3Sモデルの提案と検証」である。新製品開発過程に立ちはだかるダーウインの海の克服を目指し、顧客要望反映と社内コミュニケーション向上をめざして日本経営品質賞(JQA)の考え方を導入し、顧客要望をベースに複雑系技術の戦略策定と商品開発体系に対してスキームモデルに立ち戻る新たな3Sモデルを提案する内容である。この提案モデルを起業内で適用して有効性を示す発表であった。

3つ目は、「P2Mに基づく外部環境駆動型製品開発フレームワークの提案」である。製品開発プロセスにプラットフォーム理論、SWOT分析、ブーストゲート法を適用し、外部環境変化の収集・アイデアへの加工・製品化を実現するフレームワークの提案である。大学のグループワークにて試行実験とアンケート調査を行い、提案の有効性を示す発表であった。

最後は、「オンラインPBLにおけるプラットフォームマネジメント」である。オンライン上でのやり取りの場を情報的相互作用と心理的相互作用のマネジメントが必要であるプラットフォームとして捉え、自己調整学習の観点から社会的認知理論における三者相互のモデルと自己調整の関係性を示した。更に、グループにおける役割ごとの秘匿化されたチャ

ンネルを用いるという方策について、事例を基に考察し、自己調整の有効性を示した発表であった。

2. 副会長挨拶

午後の講演会に先立ち、亀山秀雄国際P2M学会副会長より挨拶があった。講師を始め、大会に参加した会員や一般の方々への謝辞があった。続いて、今後の学会の取り組みとして、P2Mの新たな在り方の研究に着手することについての説明があった。更に、平成30年11月に開催予定である台湾における国際大会の紹介があった。



3. 発表奨励賞

研究発表における発表奨励賞として次の各氏が表彰された。なお、本賞の趣旨は、当学会が開催する研究発表大会において、発表の技術及び内容が優れており、将来性が認められる発表を行った会員を表彰するものである。

Aトラック：新目真紀氏

職業能力開発総合大学校



Bトラック：加藤勇夫氏

K04Lab (越島研究室)



Cトラック：小田裕和氏

千葉工業大学大学院



4. 基調講演

講師：

吉川廣司氏

一般社団法人ジャパンショッピングツーリズム協会 (JSTO) 事務局次長

演題：

何を売るか、どう売るか：工夫と準備でインバウンド消費をつかめ！



内容：

初めに、ショッピングツーリズム協会の紹介があった。2013年に設立し、現在は160社が加盟している。日本の様々なショッピング

やコンテンツの魅力を国内外の観光客に伝えるプロモーション事業と、おもてなしのノウハウにより事業者を支援する事業から成っている。

次に、訪日外国人観光客の現状についての解説があった。日本のインバウンドは、頭打ちと言われるが、海外旅行者数は世界の約2%でしかなく、まだ余地がある。海外では、官製のショッピングフェスティバルがあり、旅行者の取り込みに寄与している。日本は、各県で競争するのではなく、外国との競争であることを認識する必要がある。特に、インバウンドの急成長に小売りがついていけない問題を指摘する一方で、地方での滞在が増加していることに注目している。中国東南アジアの環境客は、1都市短期滞在が地方訪問の目的であり、欧米人は、長期の滞在中に国内周遊として地方を訪問する。

地方では、地元の思惑とは違った要素で外国人に受ける事例が散見される。高知県では、地元が誇る坂本竜馬は、外国人には興味を持ってもらえないが、観光地から駐車場までの道沿いの商店街が繁盛しているという想定がの事例があった。また、現在の観光客は、ショップの中で、興味をひかれたものやお土産品をバックにした自撮り写真をSNSで発信することが常態化しており、店内Wi-Fiの整備は勿論のこと、SNSで情報を受信した人が、その店を訪れることができるように、写真に店名がさりげなく写るような工夫も大切である。外国人の行動パターンや興味の対象、移動に伴う利便性などを考慮することの必要性を説いた内容であった。



更に、「工夫と準備でインバウンドをつかめ」と題し、事例を紹介しながら、外国人観光客にどう売るかについての紹介があった。例えば、お土産品のセットを揃え、パスポートの読み取りや購入記録票の事前作成などにより、時間が貴重な観光客に効率よく販売する工夫がある。また、軽い、薄い、長い賞味期間などの携帯利便性を考慮することも大切である。広島県の銘菓「もみじ饅頭」の賞味期間は10日であり、外国人観光客の都合を考えていない。多言語表示なども必須である。

まとめとして、訪日外国人4,000万人達成の鍵は「地方への誘客」とし、訪日前の外国人に地方の魅力をアピールし、訪日中の観光客にも地方に誘導する工夫が必要であると説いた。また、観光産業隆盛のためには、観光客の数ではなく、一人当たりの消費額を如何に高めるかが大切であるとした。しかし現状は、地方の商店街の9割ほどは、外国人観光客に対してアレルギーがあり消極的である。それを前向きに転じさせるためには、儲かる話を実感させる必要があるとし、同協会がそのために支援していることを紹介した。

5. パネル討論

テーマ：

インバウンド産業雇用創生に向けた国際 P2M 学会の役割と期待

モデレーター：

玉木欽也氏

青山学院大学経営学部教授



パネリスト：

平松庸一氏

新潟大学人文社会・教育科学系 教授

根本茂氏

(株)ブロードバンドタワーAI オープンイノベーション研究所執行役員

中山政行氏

東京農工大学生物システム応用科学府 特任助教

内容：

パネリスト発表

平松氏からは、協創型社会の現状と課題として、競争から協創へのパラダイム転換の必要性を説き、少子高齢化・長寿社会の街づくりをP2Mの視点で捉えた提言があった。現実には、プロジェクトを発掘する段階からスタートし、プログラムへ発展させることでよいのではないかと論じた。特に、外国人観光客を獲得するためには、日本人とは目線が異なることを認識し、その上で地方創生につなげることの大切さを指摘した。



根本氏は、電子技術に従事した経験を基に、インバウンドを取り込みためのAI/IoTを活用する価値を説いた。例えば、AI翻訳による外国人とのコミュニケーションなどである。これを実現するためには、様々なステークホルダーの協調によるオープン・イノベーションが必要であり、参加型の観光への脱皮が必要であると指摘した。更に、AI/IoTのハード・アルゴリズムは揃っており、如何にデータを

集めるかが課題であるとし、大学やベンチャー、大企業のコラボレーションの必要性を説いた。



中山氏からは、箱根・小田原での地方創生の経験を通して、国際文化交流プログラムの作り方についての紹介があった。その中で、想定外に外国人から高評価を得たのは、地域の住民や子供たちとロケットストーブを製作するというワークショップであった。外国人を引き込む地方創生のためには、国々の文化や興味を理解し、的確に対応することの大切さを説いた内容であった。



パネル討論

次の論点に基づいてパネル討論が開始された。



① 地方都市で、インバウンドツーリストに対して、ダイバーシティカルチャーに配

慮した工夫、特にインバウンド消費の工夫やポイントは何か

- ② 地方都市で、ダイバーシティカルチャーに配慮した国際文化交流プログラムの作り方と、今後の持続可能な事業は如何にあるべきか
- ③ AI 及び ICT システムを活用した、着地型観光に向けたインバウンド広報コンテンツの発信や、異文化/多言語コミュニケーション
- ④ P2M 学会として、インバウンド×イントラバウンドの地方創生、そのための社会システムに向けた新学術領域の開拓への提言

討論の要点

○コンテンツ作り

- ・外国人旅行者を呼び入れるには、「旅の筋」に乗っていることが大切。現状は、各地でまとまりなく企画しており、筋ができていない。
- ・観光客に魅力を持ってもらうためには、コト作りが大切。急ごしらえでは直ぐに廃れるし、地域の人々が疲弊してしまう。
- ・観光地の説明やお土産の説明を翻訳しているものがあるが、面白くないものが散見されることが大切。小学生でも楽しめる文章を心掛けることが大切。
- ・アジアからの観光客では、子供連れが増えている。子供に見せたいものがどこにあるかを PR する工夫が必要である。

○呼び込みたい観光客

- ・観光客誘致は、ゆとりのある欧米人から始めるとよい。中国人観光客は、大勢で来日し大金を落としてくれるが、廃れるのも早く、誘致のための投資にリスクがある。少数を対象に、丁寧に地域の魅力を世界に発信することが大切。

○言語対策

- ・翻訳機は有用。但し、迎える側が持つのでは、相手がどこの国の人であるか分からないので役に立たない。外国人観光客に持たせる工夫が望まれる。
- ・翻訳は、外国人にとって便利だが、逆に日本語に価値を感じてくれる場合もある。マツモトキヨシでは、中国語表記を撤廃し、日本語のみに戻すことにより、日本らしさを演出している。

○観光客を受け入れる姿勢

- ・英語などの外国語を話せることも大切だが、それ以上におもてなしの心が大切である。お土産屋の「おばちゃん」は、外国語は話せなくても、笑顔と手ぶり身振りで外国人の心を掴み、売り上げを伸ばしている。

○地域の自律のために

- ・地域創生に取り組み際は、大掛かりなプログラムではなく、プロジェクトからスタートする方がよい。地域を担う人たちが、これをやりたいと言い始めることが肝要であり、やらされ感を感じさせないことが大切である。
- ・言語の壁を乗り越える「おばちゃん」達は、儲けようという気持ちから自発的に動いているものであり、笑顔が自然と湧き出ている。

○今後への期待

- ・インバウンドを取り込むためには、色々は発想が必要であることが分かった。特に、観光客にとっても魅力となる社会的な価値について研究することが大切である。

6. 懇親会

研究発表大会終了後は、青山学院大学アイビーホールフィリアにて懇親会を開催した。基調講演講師を始め、パネリストや研究発表

者、聴衆者及び大会関係者 35 名が集い、議論や親交を深める場となった。

以上



当内容にお問い合わせある場合は以下までお願いいたします。

一般社団法人国際P2M学会 事務局

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5

アカデミーセンター

当学会ホームページ上のお問い合わせフォーム

URL :

http://www.iap2m.org/regist_p2moffice.html